

2019年度追手門学院連携 SDGs プログラム “OTMs” 報告書

追手門学院大学経営学部准教授 宮崎 崇将

追手門学院大学経営学部准教授 村上 喜郁

追手門学院中・高等学校 木村耕太郎

本報告書は、2019年度に実施した追手門学院連携 SDGs プログラム “OTMs”（オーテモンズ）の取り組みをまとめたものである。

1. プロジェクトの概要

1) プロジェクトの目的

SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）とは2015年に国連で採択され、「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現を目標として、2030年までに達成しなければならない17のゴールが設定されている。大阪万博のテーマにもなっており、追手門学院でも長期構想2040の中でSDGsを重要な要素の1つとして位置づけ、学院全体をあげて取り組むことになっている。

OTMsは、追手門学院大学経営学部（村上喜郁准教授、宮崎崇将准教授）と追手門学院中学校（木村耕太郎教諭）、北摂総合研究所が連携してこのSDGsに取り組むというものである。基本的な活動は、大学生が大学で学んだ専門的な知識をSDGsの観点から活かして中学生に授業を行うものであり、SDGsを軸にした「郷中教育（ごじゅうきょういく）」を目指した。

2) プロジェクトの経緯

本プロジェクトに取り組む以前から宮崎と木村の間で“co-otemon class”という連携型授業に取り組んでいた。この活動をより発展させるための話し合いの中で、木村からSDGsをテーマにすることの提案があった。そこで地域社会や食などの社会的課題に取り組む村上も交えて、2019年3月26、27日、4月9、16、30日と複数回にわたりミーティングを行い、計画を具体化し、経営学部学部長と中高校長に許可をとり、活動を開始した。運営体制は、村上を全体統括として、宮崎が大学側の、木村が中学側の担当者とした。予算は経営学部の「課題解決型授業の推進」予算を活用した。4月に入ってそれぞれのゼミで学生に呼びかけて、参加者を募り、村上ゼミ3回生の仮谷優花、兵庫沙耶花、宮崎ゼミ3回生の安藤みなみ、大井美穂、清水優希奈、寺内夢樹、日笠山太一、

本間大資、前畠美佑が参加することになった。

2. 取り組み内容

本プロジェクトでは表1のとおり、5/31 から合計6回の授業を行った。授業の位置づけは、えてして道德の授業のような理念の押しつけになってしまうきらいのある環境などのテーマについて、そうではなく自分のこととして考えられるようになることを目標とした。そこで、大学生はそうした中学生に理解し、考え、関心をもってもらえる授業を実施できるように考え、工夫することを目指すこととなった。授業の具体的なテーマは専門的な知識を活用する観点から、村上ゼミ生が「見山の郷×SDGs」、宮崎ゼミ生が「コンビニ×SDGs」をテーマにしてそれぞれの単位で準備を進めていった。ただし、全体として一貫した授業となるように定期的に開催した勉強会で発表、情報共有を行った。勉強会は、毎週木曜日4限（15時00分～16時30分）に実施した。

授業はすべて追手門学院中学校1年B組、C組（両クラスとも23名程度）の2クラスに対して行った。授業後は、毎回、宮崎、木村、学生とでふりかえりをしてよかった点と反省点を話し合った。また、8月23日に授業そのものに関する勉強会を宮崎、木村、学生とで開催している。

各回の概要は以下のとおりである。

表1 OTMsの実施スケジュール

	日付	テーマ	担当
第1回	2019/5/31	SDGs とは	宮崎
第2回	2019/6/14	コンビニ×SDGs (1) コンビニの食品ロス問題	宮崎ゼミ
第3回	2019/7/12	見山の郷×SDGs (1) 見山の郷が抱える社会的課題	村上ゼミ
第4回	2019/7/23	コンビニ×SDGs (2) コンビニオーナーの働き方とディーセントワーク	宮崎ゼミ
第5回	2019/9/13	見山の郷×SDGs (2) 見山商品開発プロジェクト	村上ゼミ
第6回	2019/9/27	コンビニ×SDGs (3) コンビニとプラスチックごみ問題	宮崎ゼミ

出所）筆者作成。

①第1回目

第1回目は、導入として宮崎が「SDGs とは何か」というテーマで、SDGs の概要を紹介した。その上で、ゴール1「貧困をなくそう」を取り上げて、専門分野である流通に関連付けてユニクロが低価格で品質のよい商品をつくれる背景には海外の生産国の所得の低さにあり、所得が上がりれば低価格で生産することが難しくなることを説明し、社会的課題を考えることの難しさを伝えた。そして、講義の中で単に知識ではなく主体的に考える「SDGs 思考」を身につけて欲しいということ教授した。



写真1 第1回目の授業風景

②第2回目

第2回目は、宮崎ゼミの大井、清水、寺内、日笠山、本間、前島の6名が2つのグループに分かれて担当した。「コンビニ×SDGs (1) コンビニの食品ロス問題」をテーマに、食品ロスの現状、コンビニにおいて食品ロスが生じる理由などについて、グループワークや寸劇などを交えて行った。

③第3回目

第3回目は、村上ゼミの仮谷と兵庫の2名が担当した。「見山の郷×SDGs (1) 見山の郷が抱える社会的課題」というテーマで、自分たちが取り組む「見山の郷商品開発プロジェクト (略称：MSP)」について、見山の郷の概要、見山の郷が抱える社会的課題と SDGs との関係について解説した。



写真2 第3回目の授業風景

④第4回目

第4回目は、宮崎ゼミの安藤、大井、清水、寺内、日笠山、本間、前島の7名が2つのグループに分かれて担当した。「コンビニ×SDGs (2) コンビニオーナーの働き方とディーセントワーク (働きがいのある人間らしい仕事)」というテーマで、SDGs ゴール8「働きがいも 経済成長も」

に関連して、世界における労働の問題、日本における問題として、身近なコンビニの店舗オーナーの働き方の事例などについて、グループワークや寸劇などを交えて授業を行った。



写真3 第4回目の授業風景

⑤第5回目

第5回目は、村上ゼミの仮谷と兵庫の2名が担当した。SDGs ゴール8「働きがいも 経済成長も」、ゴール11「住み続けられるまちづくりを」に関連して、自分たちが取り組む見山商品開発プロジェクトを素材に、過疎化や高齢化により活気が弱まっている地域に大学生が大学で学んだことを活かして関わることで活性化する取り組みについて授業を行った。

⑥第6回目

第6回目は、宮崎ゼミの安藤、大井、清水、寺内、日笠山、本間、前島の7名が2つのグループに分かれて担当した。SDGs ゴール12「つくる責任 つかう責任」、ゴール14「海の豊かさを守ろう」に関連して、コンビニなどで使用されるナイロン袋や容器、ストロー、ペットボトルなどに使用されるプラスチックが海洋汚染につながっていること、紙ストローとプラスチックストローを実際使って比較することでプラスチックの代替の難しさについて授業をした。

3. 学園祭

本プロジェクトの成果発表として追手門学院合同学園祭（11月2・3日開催）に2つの出展を行った。1つは、中学校で、本プロジェクトを受講した中学生がSDGsについて発表するというもので、大学生がそれをサポートした。もう1つは、大学で大学生が運営する見山の郷の模擬店に中学生が売り子としてサポートするというものである。取り組みの概要を簡単に説明する。

1) 中学生の発表

本プロジェクトを受講した中学1年生B組およびC組の生徒たちに3名程度のグループになってもらい、身近な企業のSDGs活動について調べて発表を行った。具体的には、自分たちで企業

を設定し、その企業および製品・サービスの概要、SDGs の取り組みについて調べ、PPT の発表スライドとポスターを作成した。対象となった企業は表 2 のとおりである。大学生が 10 月 4 日、25 日に授業に参加し、作成をサポートした。また、学園祭前日の 11 月 1 日に発表の準備、教室の設営などを大学生も参加して行った。

3 日の発表会は、1 つのグループが発表とフロアからのコメントで合計 6 分程度の時間で発表を行い、司会も中学生が担当した。大学生は、司会の補助や誘導などのサポートを行った。当日は水野浩児経営学部長にも観覧していただき、発表の合間にコメントをいただいた。教室に備え付けのマイクがないため、携帯型の小型スピーカーを準備していたが来場者が多かったことや周囲の音が予想以上に大きかったことなどもあり、発表が聞き取りづらいこともあった。しかし、それを除くとスムーズな進行ですべてのグループが発表することができ、来場した保護者の方からもおおむね好意的な評価をいただいた。

表 2 中学生発表テーマ一覧

順番	対象企業	順番	対象企業
1	KOKUYO	11	google
2	マクドナルド	12	森永製菓
3	NIKE	13	朝日新聞社
4	adidas	14	adidas
5	成基学園、Apple	15	明治
6	カルビー	16	kanro
7	USJ	17	集英社
8	マクドナルド	18	TOTO
9	バンダイナムコ	19	google
10	森永乳業		

出所) 筆者作成。



写真4 発表会の風景

2) 模擬店

大学側は見山の郷の商品を販売する模擬店を出展した。こちらは有志の中学生が順番で売り子として大学生の活動の補助を行った。

中学生は OTMs の活動であることが分かるように、写真5にあるようなロゴの入ったビブスを着用した。このロゴは、追手門学院の8つの園、校が1つとなり「輪」を創り出す様を表し、小中高のイメージカラーであるえんじ色のフォントとした。全体の色は桜をイメージさせるピンク色を採用した。



写真 5 模擬店の風景

以上のように、世代の異なる中学生と大学生が、相互の活動を助ける形で、合同学園祭の趣旨にのっとり、また SDGs のゴール 17「パートナーシップで目標を達成しよう」を体現するような出展を行った。

4. プロジェクトの総括

以上のように、本プロジェクトは、3・4 月の準備を経て、5～11 月までの半年ほどの期間で実施した。その結果、6 回の授業と合同学園祭での出展を行うことができた。以下では、SDGs の学習という面と、学院内連携という面で簡単に総括する。

大学生にとっては、新しいことを学びながら、50 分の授業にしていくということで非常に大変であった。しかし、授業ごとの総括で課題を明確にすることでそれを意識しながら毎回改善しながら授業を行うことができており、単なる一方向の発表から双方向を意識した授業へと成長していった。また、グループで行うことから方向性の面などで学生間の齟齬は当然あったが、最終的に話し合いながら進めることができていた。

大学生自身も SDGs に関する理解や関心を深め、プロジェクト後に北海道で SDGs を推進するコープさっぽろに見学に行ったり、関西 SDGs ユース・アイデアコンテストに応募するなど、その後の活動につながっていった。

中学生にとっては、いつもの先生とは違う授業ということで大学生と SDGs が関連し合って、単に SDGs の授業を行うよりもより印象的に SDGs に接することができていたと感じられた。それゆえ、単なる理念を教える道徳的な授業ではないものができていたと考えられる。

学院内連携という面では、回を追うごとに中学生と大学生の距離感も近くなった。また、終盤はよき「お兄さん」「お姉さん」として中学生と接するようになっており、大学生は年長者としての自覚を持つことができるようになっていた。中学生も大学生に親近感をもつようになっていった。即効的な効果があるわけではないが、中学生にとって、今後の人生の中で進路や成長を考える

上で1つの参考になっていくことが期待できる。

このように本プロジェクトは初めて行ったにもかかわらず、ほぼ当初の目標を達成できたと考えられる。そして、これはひとえに参加した大学生の熱心さによるものであると考えられる。その点で、このプロジェクトは参加する学生のやる気などに依存する部分も大きく、今後同じように実施していけるのかどうか、ひとつの課題となるだろう。また、SDGsの学習という面では、ここで生まれた関心をより深め中学2年生、3年生と学年が上がるに従って、知識取得とその実践を系統的に高め、育てていくようなカリキュラムが求められるだろう。